



本県産のビワは近年、晩秋季から初冬季の気温が比較的高温で推移することなどから出蕾（しゅつらい）時期や開花時期が前進化するなどの影響が出ている。そのため、露地栽培では生育の進んだ幼果の状態で厳冬期を迎えることから寒害を受けやすい状況となっている。寒害を受け幼果が凍死したビワ樹では、春先に気温が上昇してくると、新梢（しんしょう）の発生や枝伸長が早くから進む。そのため、次年産の出蕾時期や開花時期が通常よりも前進化し、翌年産のビワ果実が再び寒害を受けることが懸念される。

確保し、生育の前進化抑制が可能であるか調査した。ビワ「なつたより」（県農林技術開発センター育成）を使用し寒害被害樹の枝先を4月6日から6月5

ビワの寒害被害対策

枝切り返し着蕾確保 生育前進化を抑制へ

日まで約20日間隔で切り返し、新梢を発生させ、秋季につぼみ（県農林技術開発センター）の着生数や生育状況を調べた。結果、ビワ「なつたより」では、寒害被害後の結果枝先端を

表 ビワ「なつたより」寒害被害枝の切り返し時期と発生した新梢および幼果の生育状況（2016）

切り返し時期	着房率(%) (11/2)	花房進度 z (11/2)	開花率(%) y (12/23)	幼果径 x (mm)	凍死果率 w (%)
無処理	100.0	3.7	90.7	10.7	48.2
4月 6日	98.7	2.8	77.0	9.0	16.7
4月26日	99.0	2.5	72.3	8.7	14.3
5月16日	65.9	1.6	47.1	8.1	15.5
6月 5日	55.0	1.3	38.8	7.9	13.0

w 2017年2月21日調査、各処理40果程度を実施
 x 2017年2月21日調査、各処理40果程度を実施
 y 1果房内における開花割合の平均
 z 花房進度1:出蕾始期、2:穂軸分化期、3:穂軸分化期、4:摘蕾適期(施設)

4月中旬に切り返すことで、十分な着蕾（着房）が確保され、生育ステージの前進化が抑制できることが明らかとなった。表。切り返し処理を実施する際、既に新梢の発生がある場合は、発生した新梢の直下で切り返しを行う必要がある。

（県農林技術開発センター 果樹・茶研究部門 松浦正）